

News Letter

森林鉄道から日本一のゆずロードへ

中芸地域

森林鉄道

高知県東部に位置する中芸地域（5町村）の山間地は、安田町、馬路村及び北川村で「魚梁瀬杉」をはじめとする良木を産出し林業で栄えました。また、木材の搬出に利用された奈半利川河口の田野町及び奈半利町は、貯木場や木材問屋の発達でおおいに栄えていました。

明治43年には、効率的に木材の搬出を行うため森林鉄道の敷設が始まり、総延長距離300km超の魚梁瀬森林鉄道（通称「りんてつ」）が作られました。この「りんてつ」は木材の運搬だけでなく、トロッコで学校に通い、トロッコで嫁入りするなど、山間地域と都市部を繋ぐ重要な「足」として人々に深く根付いていましたが、魚梁瀬ダムによる水没を機にトラック輸送へ移行してゆき昭和38年に廃止されました。その後、天然木の減少や輸入木材との価格に晒され、林業の凋落とともに地域の活気も失われてしまいました。



(空「トコ」犬曳き)



(馬路村・「りんてつ遺構」五味隧道)

日本一のゆず産地へ

ゆずの栽培の始まりは、江戸時代に北川村で庄屋見習いをしていた中岡慎太郎が農民に推奨したとされ、現在も山裾にゆずの古木が残っています。林業に変わる産業として、身近にあったゆずの魅力と価値に改めて注目しました。暮らしに根付いていたゆずの本格栽培が1960年代から始まり、川沿いの田畑をゆずに変え、山の限られた土地は石垣を築いて段々畑にして産業化を進めた結果、作付け面積は200haを超え、中芸地域は日本一の生産量を誇るまでとなりました。

日本遺産に

かつて木材を満載して運んだ「りんてつ」の軌道は、ゆずを運ぶ軽トラックの通行する「ゆずロード」として生まれ変わりました。「森林鉄道から日本一のゆずロードへ—ゆずが香り彩る南国土佐・中芸地域の景観と食文化—」は、昨年4月に文化庁の「日本遺産（Japan Heritage）」に登録されました。ゆず寿司に代表されるゆずをふんだんに使った郷土料理は、中芸地域の食文化として今も受け継がれており、日本遺産を活用して地域全体の活性化を目指す「中芸のゆずと森林鉄道日本遺産協議会」では、ゆずの生産振興と「りんてつ」遺産を活用した地域の活性化として「ゆずの収穫体験」や「りんてつ聖地見学ツアー」をはじめ、集客のためのいろいろな企画を検討しています。



(ゆずの実)

大切にしたいゆずの文化

酸味が強く香りが高いと評価される当地のゆずを皮ごと搾りその風味を活かした「ゆのす料理」が、中芸地域から日本各地に広がっています。更に海外でゆずは日本料理の食材として認知されるまでになり、近年ではヨーロッパに輸出されるまでになりました。



(ゆずはじまる祭り)

「中国四国「食と農」のポータルマップ」の改訂版の作成について

中国四国農政局では、訪日外国人が観光施設や宿泊施設、自然豊かな景観施設の体験など、中国四国地方の「食と農」を体験してもらうため、日本への旅行を企画する方や観光案内所向けにそれらの情報を盛り込んだポータルマップを作成しています。

今回、平成29年7月に作成したものについて、掲載施設を増やす等内容を拡充するとともに、日本語版に加え、新たに英語版のマップも作成しました。

当マップは、中国四国地域のJNTO認定外国人観光案内所、(独)日本貿易振興機構(JETRO)へお配りしているほか、中国四国農政局のホームページでもご覧いただけます。

なお、中国四国地域の旅行者には、(一社)日本旅行業協会中四国事務局を通じてお知らせすることとしています。



★詳しくはこちらをご覧ください。

<http://www.maff.go.jp/chushi/sesaku/export/jouhou.html#portalmap>



経営所得安定対策について



経営所得安定対策等では、担い手農家の経営の安定に資するよう、諸外国との生産条件の格差から生ずる不利を補正する交付金（ゲタ対策）と、農業者の抛出を前提とした農業経営のセーフティネット対策（ナラシ対策）を実施しています。

また、食料自給率・食料自給力の維持向上を図るため、飼料用米、麦、大豆など戦略作物の本作化を進め、水田のフル活用を図る水田活用の直接支払交付金を実施しています。

平成30年度の受付は、7月2日(月)までです。

★詳しくはこちらをご覧ください。

http://www.maff.go.jp/j/seisaku_tokatu/antei/keiei_antei.html

